

○ 東北大学工学部 学 石川 徳春
同 中山 拓郎
同 正 松本 順一郎

1. はじめに 自然界あるいは人为的に自然界に排出された水銀は、その自然界におけるサイクルへ過程でいつかは木圏に入り、直後に移行したりすることによって、揮発的条件下に置かれの場合が生じてくる。また何らかの過程を通じて木の現場へ持ち込まれた水銀も、活性汚染などにより、吸着・濃縮され、揮発性化合物プロセスに流入することも既に予想される。しかししながらこの時に銀が揮発的有機物分解へ及ぼす影響にどのような影響を及ぼすかについては、これまでここで述べたように解明されていない。そこで本実験では、揮発的有機物分解に及ぼす水銀へ影響について、特に各分解過程に対する水銀の阻害作用について、回分実験により検討を行なった。(前一部の結果は第3回国土木学会年会(1983)にて発表している。)

2. 実験方法 実験はFig.1のようなガラス製バイアルを反応容器として用いて行ない、これを35°Cに設定した恒温槽こうし培養槽中にセットして供給と搅拌を行なった。実験および種子液へ培養に用いた單一炭素源は、メタン生成反応などの実験へ場合は酵酸、酸生成反応などの実験へ場合にはグルコースである。又、種子液へ培養によく実験に用いた無機基質の組成はTable 1を通じてある。一方、水銀としては塩化水銀を用いた。次に、各回分実験へ設定条件および使用した種汚泥の性状はTable 2に示す通りである。実験手順としては、大部分の系では通常、基質と水銀溶液を予めバイアル内に入り、気相をN₂-CO₂(65:35)混合ガスで貯蔵し過夜後、種子液をシリングで揮発的に接種する。ことによって実験が開始した。但し、Run A-2とSB, IRへ場合は、Na₂S溶液 or FeSO₄溶液を予め加入した種汚泥を用い、一方Run A-2とSA, Run A-3, Run A-4とMMへ場合は、通常の手順で種汚泥を直接水銀と充分に接触させておき、一定のタイムラグ後にNa₂S溶液を注入した。又Run A-4へSR1~3へ場合は、予めバイアル内にK₂SO₄溶液やNa₂MoO₄溶液を添加しておいた。尚、Rへ密閉はRun A-4では90ml、他の場合は70mlである。

3. 結果および考察 ¹⁾結果報告したように、Run M-1, M-2およびRun A-1の結果からは、メタン生成反応と酸生成反応へ間に口明かな水銀感受性の差異は認められなかった。しかし、銀、一鉛の銀の阻害から回復しない現象が観察され、この現象内に存在する活性汚染が重要な役割を果たしている。

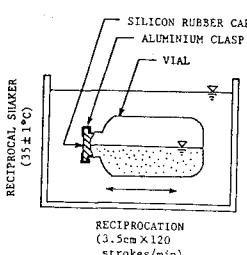


Fig.1 Batch Experiment Apparatus

Table 1. Chemical Composition of Synthetic Inorganic Substrate*	
COMPONENT	CONCENTRATION (mg/l)
(NH ₄) ₂ HPO ₄	700
NH ₄ Cl	850
KCl	750
MgCl ₂ ·6H ₂ O	810
MgSO ₄ ·7H ₂ O	250
FeCl ₃ ·6H ₂ O	420
CoCl ₂ ·6H ₂ O	18
NaHCO ₃	6720

* All components were dissolved in tap water.

Table 2. Conditions of Batch Experiments

RUN NO.	MEDIUM (mg/l)	SUBSTRATE (mg/l)	MERCURY (mg/l)	SURFACE (mg-S/l)	INPUT* (mg/l)	MOLYBDATE (mM)	TIME LAG
H-1	345	(ACETATE) 1000	0, 0.1, 0.5, 1, 5, 10, 50, 100, 500, 1000	7	86		
H-2	365	(ACETATE) 500	0, 0.1, 0.5, 1, 5, 10, 50, 100, 500, 1000	11.6	86		
A-1	232	(GLUCOSE) 5000	0, 5, 10, 50, 100, 250, 500	8.2	86		
CO				16.0	86		
A-2	SA	(GLUCOSE) 5000	0, 5, 10, 50, 100, 500	81.2 (65.2 ADDED)	86		15m
SB				81.2 (65.2 ADDED)	86		
IR				16.0	142 (56 ADDED)		
A-3	405	(GLUCOSE) 5000	500	95.9 (80.0 ADDED)	86		10s, 10s, 1m, 2s, 5s, 10m, 30m, 1h, 2h
		(SULFATE)	0			0	
SR0			2700			0	
SR1			1350			0	
SR2	480	3900	1350	21.8	86		
SR3			1350			0	
MH	480	3900	-	500	92.9 (71.1 ADDED)	86	4.4, 1.5m, 30m, 2h, 5h

*Theoretical values.

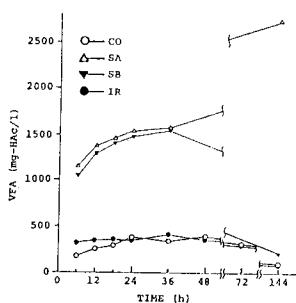


Fig.2 Time Course of VFA Production in Each Run of A-2 at 500 mg-Hg/l

るらしいことが分かった。このことは Fig. 2 に示すように、通常は完全な阻害が生じる水銀濃度(500 mg/l)においても、その水銀とはほぼ等モルの硫化物が存在する場合(SA, SB)には、酸生成反応は極めて良好に進行したことによつてきただけである。次にこの良好な酸生成反応

2つの系について検討してみると、Fig. 2 に示すように、

ある程度酸生成が生じた後、SB の系では VFA の減少が観察され、一方 SA の系ではそのような現象は生じない。そこで Table 3 に示すように、SB の系ではメタニ生成が確認された。以上の現象と実験条件の違いを考え合わせるならば、メタニ生成反応の方が酸生成反応よりも水銀によつて阻害されることが多いことが予想される。そこで二つとを確かめるために Run A-3 を行なった。この実験では、最初水銀が添加され、その後水銀濃度と時間(タイムラグ)へ長短と各反応の有無により、酸生成や水銀濃度が示されるが、Fig. 4 のよ

く酸生成反応は最も長いタイムラグの系(2 h)でも実験開始後2時間目までに生じ、一方メタニ生成反応は、Table 4 に示すように、タイムラグが長くなるにつれて開始が遅れ、しかもタイムラグがほんの一数倍大きいほどでもメタニ生成の開始が著しく遅れることが観察された。以上より、VFA カラーメタニ生成反応のオガ酸生成反応よりも著しく水銀感度が高いことが分かった。次に Fig. 3(A-1)、および Fig. 4(A-3) に示す酸生成の経時変化について見てみると、Run A-1 の 50 mg-Hg/l の系や Run A-3 のタイムラグが 2 時間の系によつて、酸生成が遅から回復した系では酸生成は他の良好な酸生成を示す系と同程度とな

りていい。一方、硫酸生成はあまり活性には生じなくなつて、いることが観察された。このことから同じグルコースカラーメタニ生成反応のオガ酸生成反応よりも水銀の阻害作用を受け易いものと推測される。次に、嫌気的環境中で主要反応の一つである、水銀の阻害作用と微生物に関連している底質還元反応について、Run A-4 によつて検討を行なつた。酸生成もメタニ生成も完全に阻害された 500 mg-Hg/l の系について見てみると、硫酸イオンを添加して SR1 の系では実験開始後約 15 日までグルコース消費と酸生成活性が生じ、硫酸還元(図の斜線部)も生じていいこと、Fig. 5 に示す。一方、硫酸還元(SR0)や、硫酸還元菌への阻害剤であるモリブデン酸と硫酸還元添加(SR3)した系では酸生成活性などは生じない、たゞこれら、硫酸還元反応のオガ酸生成反応よりも水銀感度が大きいものと結論づけられた。

((参考文献)) 1)石川松本、佐藤; 第3回年報、II, 615 (1983) 2) Smith, R.L. and M.J. Klug; Appl. Environ. Microbiol., 42, 116 (1981)

Table 3 Methane production after 72 hours

RUN NO.	MERCURY (mg/l)					
	0	5	10	50	100	500
CO	+	+	+	+	+	-
SA	+	+	+	+	+	-
A-2	+	+	+	+	+	-
SB	+	+	+	+	+	-
IR	+	+	+	+	+	-

Table 4 Effect of Sulfide on the Inhibitory Action of Mercury in Methane Production

TIME LAG**	TIME COURSE (h)					
	3	24	60	120	156	206
10 s	-	--	++	++	++	++
30 s	-	--	++	++	++	++
1 m	-	--	++	++	++	++
2 m	-	--	++	++	++	++
5 m	-	--	-	-	+	++
10 m	-	--	-	-	+	++
30 m	-	--	-	-	-	++
1 h	-	--	-	-	-	++
2 h	-	--	-	-	-	-

* : Hydrogen was detected.

** : Time lag between mercury addition and sulfide addition.

- : Methane was not detected.

+ : Methane was slightly detected.

++ : Methane was certainly detected.

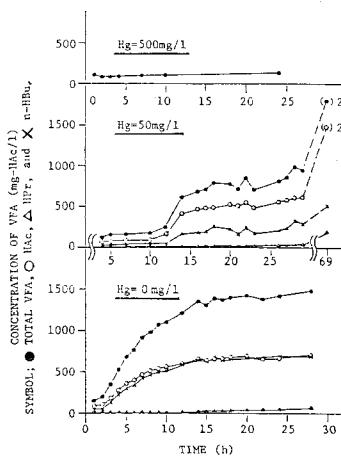


Fig. 3 Time Course of Acidogenesis in Some Runs of A-1

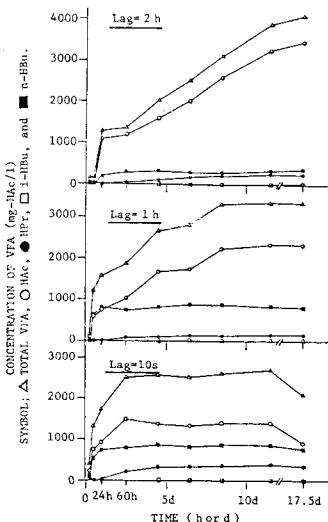


Fig. 4 Time Course of Acidogenesis in Some Runs of A-3

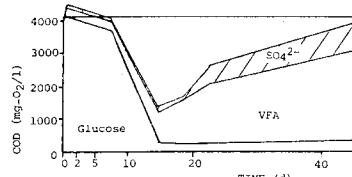


Fig. 5 Time Course of COD Conversion in SR1 at 500 mg-Hg/l of Run A-4